

明治の佐伯三青年 (26)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

政府の策略 ①

「矢野さん。どうかしましたか、顔色がわるい」

藤田は心配そうに問いかけた。

「うん。出社の途中、急に寒気を感じてめまいがするんじや。暖かくなつたというのにのう」

矢野はつらそうに頭をかゝえこんだ。

「それは気をつけねば。陽気のせいだけではありますまい。きつと疲れが出たに違いない。官を辞してから社の立て直し、どうやら新党の結成までこぎつけると、この板垣騒動息をつく暇もなかった。少し休まれれば如何がですか」

藤田は休養をすゝめた。

「そうするか。今朝ばかりは頭ががんがんです」

矢野はこう言って、早退を決めながら佐藤を呼んだ。
佐藤蔵太郎が二階に上ってきた。

「どうだ。仕事は大分なれたか」

佐藤は大きく頷いた。

「ところで、今日は体調をこわして帰ることにするが、その旨を沼間さんに伝えてくれぬか。今日明日にも沼間さんと大隈さんを訪ねる予定にしていたが、この調子ではどうにもならぬ。そう言えば、沼間さんが勝手に一人で動くわい」

矢野は、佐藤へ沼間への伝言を頼んだ。

「それがいい。社の方は書き手も揃ったし、大隈さんには使いを出して置く。少し休まれた方がいい」

藤田はこう言って、俥を玄関へ廻すよう指示した。

「一晩寝れば治るわい。大隈さんの用事も大体の見通しはついている。板垣事件で自由党に何かの変化があるかもしれない。わが改進黨の党勢拡張には好機かもしれないが政府の動きも気になる。そんな事であろう」

矢野は藤田にこう言い残して車上の人となった。

これまでの矢野は全く多忙であった。まず大隈派の言

論機関として社の立て直しを図った。そこには三田派といわれる福沢門下生の論客が集まった。矢野・藤田をはじめ、犬養・尾崎・箕浦の元に加藤政之助も参加したが出ていく者もあった。矢野と肌の合わなかった原敬はこの時退社したが、とにかく報知社は、民権論者の一集団としてまとまった。言論機関の拠点が出来ると、矢野は自由党の結成に遅れじとばかり、大隈・福沢の間を東奔西走する。この時期が、日本政党史の始動時期であるが、矢野はまず僚友沼間一派の嚶鳴社を誘い、大隈傘下の小野梓が率いる鷗渡会と連絡し、報知組の東洋議政会の三者が合体して立憲改進黨の旗揚げとなることは前に書いた。矢野はこのまとめ役として動き廻ったが、自由党・改進黨が結成されると、政府もじっとしてはおれなかった。福地源一郎を誘い、丸山作楽・水野寅次郎・羽田恭輔等を集めて立憲帝政党という御用党を組織させた。そこに板垣事件が起ると、流言は流言を呼んで矢野は情報集めと分析にふり廻され、休む暇もなかった。その疲れがどっと出て寝こんでしまった。

矢野の病いは意外に長びいた。

矢野の回復を待ちきれない沼間は、数日後藤田を誘って大隈邸を訪れ、その帰途矢野を見舞った。矢野は読書中であつたが、床に体を起して沼間を迎えた。

「まだくたばるのは早いぞ」

相変わらず口の悪い沼間であつた。

「今は大隈さんを訪ねたが、むしろ二人の顔を見て、勇ましいのが来ると恐いのうと笑っていた。おぬしが寝こむと何かと連絡に困るらしい。早く元氣にならぬかい」

沼間は言うだけ言うと言っていた。

「何か急用でも」

矢野は問い返した。

「いや。急用といえば急用だが、別に急ぐこともない」

「例の一件ですよ」

傍から藤田が口添えした。

「板垣事件は無事に一件落着した。帝政党の野郎共が仕組んだとは思われぬが、政府の動きが急に激しくなったと言うんじゃ」

「また言論の弾圧ですか」

「いや。急な弾圧は逆効果になる。政府もそこまで馬鹿じゃない」

「とすると」

「奴等の狙いはもっと深いんじゃない」

沼間の口はどこまでも悪く語をついだ。

「要は、自由党と改進黨の勢力に、帝政黨がどこまで對抗出来るかということじゃ。奴等はそれが恐いんじゃない」

「成る程。数の上ではわが方に勝目がある。たゞし、それは両黨が手を結んだ上でのことじゃ。板垣事件で自由黨の勢力がそがれるとむつかしくなる。」

「そこじゃよ矢野。かりに両黨が手を結べばどえらいことになる。しかし、こりゃ今までの経緯から至難のわざじゃ。大隈さんもその事については口を閉ざしたが、板垣さんと何か連絡があるのかもしれない」

「何か勾ってくるぞ」

「その勾いが肝心じゃ。政府にすればその勾いを先取りする。つまり、両黨にけんかをけしかける」

「その間に帝政黨の地盤を確立する」

藤田が割って口を挟んだ。

「けんかをしている場合じゃないが」

矢野は顔をしかめた。

「その通り。われわれもそれは承知だが、政府は手段を

選ばずいろんな手を打ってくる。要は政黨の切り崩しが眼目じゃ。その見通しを立てねばならぬ」

沼間の説明は明快であった。

「こゝまできて切り崩されたのではたまらぬ」

矢野も政府の謀略戦は身にしてみていた。

「大隈さんの言う通り。今度こそ政府の罠に入ってはならぬぞ。注意せねばのう」

沼間は、政變の二の舞いは御免だとばかりに注意を促した。

「そうですか。大隈さんもいろいろ考えておられる」

矢野が独り言のようにつぶやくと、藤田が話題を変えた。

「そういえば、大隈さんは学校の設立を考えているらしい」

「それぞれ。今からは若い人材が必要になってくる。あそこには、小野をはじめ學者の卵が多いからのう」

沼間はこう言って他人事のように笑っていた。

「その話は前から聞いていた。向島の学生仲間であろう小野の所に集まるの聞いていたが、そんな準備があったのかもしれない」

矢野は思い当るふしがあるように頷いた。

「大隈さんも閑職になって福沢に刺激されたのかもしれぬのう。何もかも動き出すわい」

「じっとしてはおれぬのう」

思わず矢野は溜め息をついた。

「そうよ。日本が動き出すというのに、のんびり寝ている奴があるか」

沼間の激励に矢野は自然に頭に手をやった。

「ところでこれはなんじゃい」

沼間は傍の本を手を取った。

「ほうーギリシャ史か。相変らず勉強家じゃのう」

「こういう時でもなければ、本を読む暇もない」

「そうか。立憲政体のあり方を外国に学ぶか。寝ている暇もないのう」

沼間は高笑いしたが、沼間自身、矢野の勉強家には感心し、矢野は一瞥して真意をくみ取る沼間の学識と見識には尊敬していた。

「ところで茂吉。報知も書き手が揃ったが、余り俺のところを出しぬくと承知せんぞ」

珍しく沼間の商売気のある発言に、三人はどっと笑っ

たが、当時、東京日日の福地に対抗する論説家として、藤田の文才は二人とも認めるところであった。

表紙解説 血盆塔(けつぼんとう)

場所 宇目町大字千束字豊藤 宝光庵
年代 推定 江戸時代末期
地上高 一四〇センチ

仏教大辞典(織田)によると、血盆経。又は女人血盆経。また地藏本願経に飲血地藏を説けるをもつて、支那の人、日蓮正教血盆経と云うを作り、本朝古代の禅僧またこれを擬作して、女人血盆経と名づけ、曹洞宗の授戒会などにこれを女人に授興す。

(孝感冥禅録上注)享保十九、(鹿谷宝洲注)。に世に杜撰の女人血盆経あり。誰人の妄造せるや中略・・・然れども異朝にも久しく行わると見えたり、緒経日誦といへる唐の書にもまた、この経を載す。現行の血盆経は應永(一三九四―一四二八)の頃下総国我孫子町正泉寺の和尚の感得せし由、彼寺の縁起に見ゆ、とある。

医療施設のなかった昔の人達は信仰によるほかなく、たまたに医者が居ても一般庶民には無縁の存在であった。血の道の病気に苦しんだ婦人たちによって造立されたものであろう。

写真並びに説明 軸 丸 勇